

大学ランキング¹⁾の変遷

タン ユウヤン
譚 玉洋

はじめに

近年、経済と情報技術の発展によって、高等教育は大衆化・ユニバーサル化し、知識社会化、社会・経済のグローバル化も進展している²⁾。このような状況に対して、高等教育機関は様々な対応をせまられている。また高等教育は量的な拡大をする一方、その質が問われている。さらに、大学の経営コストも増加し³⁾、公的資金に頼るだけでなく、個人負担と企業への依存度が増える結果、高等教育への投資の効率性が問われてきている。

一方、市場化が進む国際社会における大学は、社会との関連が強まり、市場化の渦にまき込まれていると言えるだろう。知識の生産と伝達の活動を支える組織的形態として形成された大学は、現在、新しい使命を担わされつつある。それは社会的責任と社会への貢献(2006年教育基本法7条⁴⁾)である。そのために、社会(大学外部世界)へと大学の中身に関する説明や情報提供を行う責任(アカウンタビリティ)を高等教育機関はもつべきであると言われるようになってきた⁵⁾。すなわち、高等教育は国際社会市場化が進展する中、「教育消費者」と「教育投資者」等へと大学の質に関する情報を提供することが求められているのである。しかし、そのプロセスや成果は極めて多様かつ複雑であるため、それらの責任を担うことが難しい状態である。また、政府等の第三機関による大学への評価(認証評価など)だけでは、今日の教育改革と社会が求める大学に関する情報の知る権利に応えることが難しい。他方、大学の目的は教育と研究であり、理念は自由と自律であるため、市場化社会の需要に応じるべきではないとも指摘されている。

こうした流れの中に、社会側の大学に関する情報の需要と大学評価の現状との間のギャップを埋めるため、仲介として、一般人に受け入れられやすい大学ランキングが作られてきた。大学ランキングは大学外部(受験生や保護者、雇用者、産業界、留学生、政府)へ大学の業績と財務⁶⁾などに関する情報を提供するための主に民間による評価⁷⁾である(社会的監視とも言える)。

大学ランキングを「市場型評価」⁸⁾と位置づけ、高等教育と社会へ大きな影響を与えるものとして重視する人がいる。一方、大学ランキングは科学性や正確性、公平性が欠けているという批判もされている。ランキングそれ自体が問題であるという反対する主張もある。その他、ランキングの功罪は別として、その拡大が自然の流れであるという見方もある⁹⁾。現実としては、大学ランキングは、無視できないほど広がりつつある。ランキングを擁護するにせよ、反対するにせよ、ランキングそのものについての理解を深めることが必要だろう。

大学ランキングの作成プロセスと影響を検討する研究はいくつかある。その一方で、大学ランキングの全体像に関する資料はあまり見られない。それゆえ本稿では、現在のランキングの流れを理解するため、大学ランキングの発足、展開、システム化について、その全体像を大まかにまとめて

いく。それによる、大学ランキングに対する理解を深めにする。こうした作業を通して今後の研究の準備とする。

1. 大学ランキングの概要

(1) 大学ランキングの発足

大学ランキングは1980年代(1983年)にアメリカで始まったと多くの研究者が論じてきた¹⁰⁾が、実は1967年に、『ゴーマン・レポート』が出版されている。それが大学ランキングの先駆と言えよう¹¹⁾。1998年までに、第10版まで刊行された。アメリカ国内並びに世界の大学を5.00満点で点数をつけ、序列化するものであった。今日の大学ランキングとほぼ同じであるが、データの出所や評価の根拠も示されておらず、その順位もおよそ不自然で(1987年から1997年まで、ゴーマン氏自身が留学したパリ大学は10年間一貫して世界第一位になっている)、アメリカ国内でも大学評価の専門家から厳しく批判されてきた¹²⁾。そのため、『ゴーマン・レポート』はその後しばらく刊行されなかった。近年、この『ゴーマン・レポート』を再刊する有名出版社が現れた¹³⁾。しかしその恣意性が批判され、公式に言及されることはほとんどなくなったと言ってよい¹⁴⁾。

その他、US News and World Report(以下USNWRとする)は大学進学希望者と保護者が最良の大学を選択するため、できるだけ多くの情報を提供するという目的から、全米の学士課程の大学ランキングを1983年以降発表している。USNWRは、大学総長、研究科科長と高校進学事務所担当の協力により、大学評価のあり方を検討した。彼らは社会からの高等教育への要求や高等教育発展の特徴に従って、評価の基準と、その詳細である指標を作った(表1¹⁵⁾)。また、高等教育に関するカーネギー分類(Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching's 2006 Basic version)¹⁶⁾によって、アメリカの大学を4つの大学群にカテゴリ化した。それは全国総合大学、全国単科大学、地域総合大学、地域単科大学である。また、大学に関する各指標に従ってデータを収集し、重みをつけ(配点比率)で、各学校の総合点数を計算する。総合点数最高の大学は100点とし、他の大学の点数は以下の式に従う:大学の点数=大学の総合点数÷最高大学総合点数×100。そのように計算した点数を順位つけ、ランキングして、USNWR週刊誌で発表された¹⁷⁾。USNWRの大学ランキングは最初二年ごとに発表していた。1987年からは一年に一回となり、また、大学院ランキングも開始された。(表1)

USNWRの大学ランキングはアメリカ国内だけではなく、イギリスにも影響を与えるようになる。英国の日報であるタイムズ高等教育附録(The Times Higher Education Supplement, 以下THESとする)は1986年にイギリス高等教育機関単科ランキングを公表し始める。その後、毎年、全英大学ランキングを作り出した¹⁹⁾。このように、各国においてさまざまな大学ランキングが次々と出されている。

表1 USNWRの全米大学ランキング指標システム(2008年度版)

基準	基準の配点比率	指標	指標の配点比率
ピア・レビュー	15%	ピア・レビュー ¹⁵⁾	100%
選抜性	15%	合格率	10%
		高校クラスでトップ10%の者の割合	40%
		SAT/ACTスコア	50%
教員資源	20%	教員報酬	35%
		学位教与者割合	15%
		フルタイム教員比率	5%
		ST比	5%
		20人以下のクラスの割合	30%
		50人以上のクラスの割合	10%
卒業進級率	20%	卒業率	80%
		新入生の進級率	20%
財政資源	10%	教育・研究・学生支援・管理運営費	100%
同窓生の寄付	5%	同窓生の寄付比率	100%
卒業達成率	5%	卒業達成率	100%
合計	100%		

(2) 大学ランキングの展開

高等教育において、アメリカの動向を常に注目している日本では1994年3月に『大学ランキング』(朝日新聞社)が創刊された²⁰⁾。同誌は大学における教育、研究、社会貢献、入試などにわたって、多面的な指標をデザインして、総合的なランキングを目指すものである。2011年版では、77種類のランキングが紹介され、大学に関する様々な側面が測られている。たとえば、政治家の出身ランキング、学生生活ランキング、就職支援ランキング、外国人留学生ランキングなどがその例である²¹⁾。その他、ビジネス誌『週刊ダイヤモンド』の「役に立つ大学」ランキング(1992年～)と「出世できる大学」ランキング(2005年～)、『週刊東洋経済』の「本当に強い大学」ランキング(2000年～)などの特徴的な大学ランキングも出された²²⁾。

中国では1987年9月、中国管理科学研究院科学学研究所において、アメリカのフィラデルフィア科学情報研究所が公表したSCIデータベースのデータに基づき、『科学技術日報』で「中国科学計量指標的ランキング」を公表し、中国の87名門大学をランキングした。このランキングから、中国の研究者による中国大学評価の定量的な研究が始まったのである。それから、研究機関や、政府や、民間団体、個人さえも大学ランキングを作り出した。さらに、2003年に、上海交通大学は独自の「世界研究大学ランキング」を生み出した。それは、他の世界大学ランキングに大きな影響を与えた。

USNWRは中国の「世界研究大学ランキング」の影響を受けて、アメリカでの国内大学ランキングを多様化した上、2004年に特色ある国際大学ランキングを作り出した。すなわち、世界ベスト大学ランキングシリーズという地域別と学科別の大学ランキングである。一方、イギリス国内では、高等教育を扱ってきたTHESはQS社(Quacquarelli Symonds社)のノウハウ(ビジネススクール・ランキングや留学生仲介ビジネスをする)を加え、2004年に、THES/QS世界ランキング(「世界大学ランキングトップ200日本語版」)を公表した。それは優秀な留学生のアメリカ一流大学への一方的流出のくい止めという目的を動機付けたそうである。その後、2006年から出版されたNewsweek誌の大学ランキング(「グローバル大学ランキングトップ100」)は、これらに対するアメリカの防衛策だろうといわれている²³⁾。国際大学ランキングは世界留学生市場における、優秀な留学生を獲得するためのツールになるとも言えるだろう。

その一方、たとえば、ドイツや、フランスや、カナダなどの国々でも、大学ランキングが作り出された。現在に至るまでに、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、北米、南米のおよそ30カ国²⁴⁾で国際大学ランキングが作られている。また大学の教育・研究・社会貢献という三つの側面について、単科大学と総合大学、学部課程と修士課程と博士課程、カテゴリ別と地域別、国立と私立などのランキングを作り出してきた。たとえば、「世界研究大学ランキング」、アジアトップ大学ランキングなどがある。

そして、大学ランキングの制作機関は新聞社や雑誌だけではなく、個人や教育機関や研究センターや同窓会や政府さえも参入してきた。さらに、大学ランキングの社会的な効果を利用し、宗教、政治等に関わる各種団体も大学ランキングの制作に入り込んだ。一例として、青年アメリカ基金会(Young American's Foundation)がある。彼らは保守的なキリスト教会の利益を代表し、保守的な思想の価値を広げるために、「最保守的な10大学ランキング」(2006-2007年、三回に)を公表した。大学ランキングは大学間の国際的な競争を引き起こしただけではなく、社会各集団間の競争舞台になるとも言えるだろう²⁵⁾。

(3) 大学ランキングのシステム化

大学ランキングは出版社、雑誌、新聞社、テレビ²⁶⁾、インターネットなどによって、速やかに、社会の広い範囲へと、深く影響を及ぼした。ランキングに関わる人々からは激しい反応が出されている。

最初から、各国において大学ランキングに反対する声があった。そして、90年代から、ランキングの氾濫に対して、反ランキングの声は高まってきた。大学ランキングの手法やデータの集計などの合理性とランキングする価値があるかどうかという学問的な角度から、何人かの研究者はランキングを批判した。ある大学は、ランキング結果の正確性、公平性に対する疑いとランキングによる偏った大学の印象への懸念から、ランキングを排除しようと努力した。その中、1996年には、スタンフォード大学総長からUSNWRへ反ランキングの手紙が提出されている。2007年に、60名以上の総長はピア・レビューへ参加しないと宣言し、ランキングの代わりにするものを懸命に考え

てきた²⁷⁾。さらに、名門大学の大学ランキングへの参加拒否によって、大学ランキングが作られなかったこともある²⁸⁾。

しかしながら、政府や教育消費者や投資者らの正式な反ランキングの声はほとんどないと言えよう。他方、ランキングの制作者らと一部の名門大学は、利益を獲得するために、信頼できそうな大学ランキングを作り続けることを支持した。大学ランキングを作ることは、自由であるが、大学ランキングを発表した責任を担わせることができる。それでも、いま、それに関する制度や法律は不完全である²⁹⁾。

それゆえに、ランキングをシステム化すべきであるとする研究者がいる。大学ランキングは大学評価の手段の一つと情報提供のツールの役割をもつ³⁰⁾ほか、高等教育の改革の促進、大学経営の改善や、政府高等教育に対する政策の制定の参考になりうる。さらに、留学生市場における、学生を獲得する手段にもなる。一方、社会からのチェックとして、新しい大学評価システムの形成にも役に立つかもしれない。このように考える人々は、ランキングする価値があると信じ、歴史の浅い大学ランキングを改善しようと努力した。

ユネスコ・ヨーロッパ高等教育センター（UNESCO European Centre for Higher Education : UNESCO-CEPES, Bucharest）と、高等教育政策研究所（Institute for Higher Education Policy, Washington）によって、2004年に国際ランキング専門家グループ（International Ranking Expert Group : IREG）が結成された。IREG - 学術ランキングとエクセレンス国際会合（IREG - International Observatory for Academic Ranking and Excellence）第二回会合（2006年5月18 - 20日於ベルリン）において、ランキングの質を保証するための国際的な原則「高等教育機関のランキングに関するベルリン原則」を確立することを検討し、高等教育機関のランキングのための初めての国際的な原則を生み出した。「ベルリン原則」では16の原則によって、ランキングが目指すべきグッド・プラクティスの重要な基準や勧告が明示されている。ランキングの目的・目標、指標のデザインと重み付け、データの収集と処理、ランキング結果の呈示に関して、ベルリン原則による検討している³¹⁾。

この時点において、大学ランキングはシステム化し始めたと言えよう。

2. 大学ランキングの作成プロセス

（上海交通大学による「世界研究大学ランキング」を一例として）

各大学ランキングの作成プロセスは、各国や作成者の目的などによって、その指標や、データの集計方法や結果の提示が異なってくる。本節では、上記で述べた「ベルリン原則」に影響を与えた上海交通大学による「世界研究大学ランキング」（Academic Ranking of World Universities、以後ARWUとする）を一例として、大学ランキングの作成プロセスを述べる。

(1) ARWU を作成する背景と目的

1998年5月から中国では、世界に通用する一流大学を作るために、「985工程」の建設プロジェクト³²⁾を進めた。そのために、世界の一流大学のあり方を知るために、上海交通大学は2000年から、世界一流大学の特徴を系統的に分析した。その分析をもとにいくつかの比較指標を設定し、さらにそれに基づいて世界大学ランキングを作成した。ランキングの順位によって、中国の名門大学と世界の一流大学との差を見つけようとしたのである。その結果、「985工程」の建設プロジェクト以来、中国の名門大学は世界一流大学との差を縮めてきていることがわかった。

2002年以来、上海交通大学はその定量的な分析方法を改善し続けている。2003年8月には、上海交通大学高等教育研究所のホームページで「世界研究大学ランキング英語版」を公表した。その後、今まで、毎年8月に更新している。

(2) ARWU の指標システム（指標のデザインと重み付け、データの収集と処理）

ARWU は以下の指標を持つ。

基準	指標	コード	配点比率
教育の質	ノーベル賞とフィールズ賞の同窓統合数	Alumni	10%
教員の質	ノーベル賞とフィールズ賞の教師統合数	Award	20%
	各領域で、被引用数高い科学者数	HiCi	20%
研究成果	『ネイチャー』と『サイエンス』で論文の発表数	N&S* ¹	20%
	SCIE* ² とSSCI* ³ に収録された論文数	PUB	20%
教員一人あたりの成果	以上五項目を数値化したものの平均値	PCP	10%
統計			100%

¹ 文系大学に、N&Sは考えない、その重み付けは他の指標に平均値でいる

² SCIE (Science Citation Index-expanded) 科学技術引用索引

³ SSCI (Social Science Citation Index) 社会科学引用索引

表1 上海交通大学の「世界研究大学ランキング」の指標体系（筆者が一部改変）

ARWU はUSNWR とほぼ同じ統計方法で、指標を計算し、大学を順位つけ、ランキングする³³⁾。

ARWU はピア・レビューという主観的な指標がないことが特徴である。そして、その目的や、作成手法や、データの出所、さらに、問題点³⁴⁾もホームページで公表している。各大学は自分の大学に関する数字を確認することができ、集計方法を検討することもできる。今までの大学ランキングの中では、信頼性や、客観性が高いと言えよう。

(3) ARWU の結果の呈示

ARWU は以下のような大学を選んで、ランキングを作成する。ノーベル賞とフィールズ賞を受賞する教員や、同窓生のいる大学、専門領域における高い引用率を持つ教員のいる大学、第一著者として『ネイチャー』と『サイエンス』で論文を発表した教員のいる大学、また、各国の主な名門

大学もランキングの対象とする。ARWUが分析した大学は2000ほどあるものの、ランキングに挙げられる大学は1000である。さらに、ホームページに掲載される大学は500位以内のものである。そして、100名以内は順位付けされた形で公表される。100位から200位までは、50大学ごとにグループ化して公表される。200位から500位までは、100大学ごとにグループ化して公表される。

ARWUの作成に関する方法や指標システムやデータの出所や集計方法などが上海交通大学高等教育研究所のホームページでランキング表と一緒に公表され、ランキング利用者や研究者などがチェックできるようにしている。そして、年別（2003年から2010年まで8年）、領域別（理科、工科、生命、医科、社会科）と学科別（数学、物理、化学、コンピュータ・サイエンス、経済・商学）を分けて表示し、簡単に検索できる。

さらに、ARWUは「世界研究大学ランキング」の使用法にも言及している。「世界研究大学ランキング」は大学の国際的な地位を見る一つの視覚であり、人々はこのような大学ランキングから大学の順位だけではなく、大学に関する情報を提供するツールと見るべきである、と述べている。

おわりに

以上、本稿では、大学ランキングについてその発足、展開、システム化を大まかにまとめてきた。これらの研究を通じて、以下のことについて理解を深めてきた。

大学ランキングは発足から今まで、その作成プロセスに関する合理性、科学性と公平性を問われている。また、ランキングの結果の公表によって引き起こされたこと、すなわち、大学ランキングの影響と社会的効果も注目されてきた。その中に、大学ランキングを擁護する立場がある。大学ランキングの影響を分析し、良いところを見いだそうとする。そして、よりよいランキング作りを模索している。また、ランキングは全く主観的・恣意的なものであり、その結果の呈示は高等教育への悪い影響をもたらし、社会に偏った情報を提供するという反対する立場もある。彼らは大学が自治組織として自律性を持つ存在であることを強調する。

大学ランキングを擁護する観点は、三つの前提を呈示している。①高等教育は市場化し続けること、②大学評価は大学外（高等教育と関係なく）第三者参入が必要となること、そして、③大学ランキング自身は改善可能であること、である³⁵⁾。本節では、その三つの条件を前提とした。つまり、大学ランキングそのものに反対する立場を十分論じてはいない。それは今後の課題である。よって、以下に述べる課題は、大学ランキングをシステム化していくための問題点のみにふれている。

大学に関する情報提供の課題：まず、大学に関する情報の不足である。大学側は情報を提供する社会的義務があるといわれている。よって、情報開示が今後いかなる体制や方法によってなされるか、あるいは、そのための環境整備にいかなる配慮が必要かなどを検討すべきだろう。また、大学が提供した情報が正確かどうかの問題もある。一つは、情報提供に関する説明が曖昧であるため、各大学から提供された情報（主に数字）が標準一致していない場合がある。たとえば、教員数といってもフルタイム教員だけなのか、それとも非常勤講師も入れるのかなどである。もう一つは、大学

側はランキングの上位になるため、何らかの方法で不正な情報を提供している可能性もある。提供された情報の再確認と関係者の資質を向上させることについて、今後も検討すべきであろう。

ランキング制作プロセスに関する問題：現在のランキングの制作方法には次のような問題点がある。①質問紙調査による人々の意識や感想など、「意見集約型評価」³⁶⁾に依存しすぎること、②定量的指標への偏重、定性的な情報の軽視、③ランキング制作者の性格（資格とも言える）と権利化への認識が薄いこと、④英語圏大学が優位となりがちであること³⁷⁾、である。

ランキング情報利用者に関する課題：今まで、ランキング情報を利用している人々は主に、大学進学希望者と保護者、同窓会、在学生、雇用者、企業界（投資者とも言える）、大学経営者や教授、政府である。しかし、大学ランキングは問題点をもち、多くの研究者に批判されている。ランキングを利用する人はどれほどランキングを信用しているのか、そして、もし信用するならば、どのようにランキングを利用するのかは今後の大きい課題である。さらに、ランキング情報への依存の加速によって、各自の自主判断能力の後退³⁸⁾の恐れがある。他者の作った概念枠組みを無批判に受容し従うことを避ける必要があるだろう。

ランキングに対する大学のアンビバレント³⁹⁾と対応に関する問題：ランキングに対して大学側はアンビバレントな感情を抱いている。大学ランキングは各大学のあらゆる側面を表すことが難しいため、すべての大学を満足させることは難しい。とはいえ、大学ランキングはある程度大学の情報を正しく社会へ伝える。それによって利益を受ける大学もある。そしてさらに、大学は自治組織の自律性を持つため、ランキングに応じる必要があるかどうかまた躊躇している。

「ランキングが学生の流れを左右する力を増すとともに、学校の側が様々な駆け引きを使ってランクをあげよう⁴⁰⁾」としていることも事実である。中には、ランキングに左右されないために、あるいは、国際的評価を必要としないと考えているために、ランキングを拒否する大学がある。それに対して、「もちろん国際競争社会から逃れて（あるいは拒否して）、日本国のローカルな大学として生き残っていく方向もある。…ただし、このような学校は減少する青年人口をめぐる国内学生市場の競争に打ち勝っていかなければならない」⁴¹⁾と喜多村は指摘する。ランキングに対するアンビバレントな感情をもって、大学はランキングへとどう対応していかなければならないのか。大学の存在意義を含めて、改めて検討する必要があるだろう。

【注】

¹⁾ 文日本では偏差値による大学ランキングが力を持っている。しかし、本稿では世界的に影響力を持つランキングに注目する。そのため、今日は、日本の偏差値による大学ランキングには言及しない。

²⁾ 文金子元久「大学ランキングと大学」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、5頁。

³⁾ 文同上、6頁。

⁴⁾ 文根岸正光「研究による大学ランキング」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、20頁。

- ⁵⁾ 文 A.I.Vroeijenstijn Guide for External Quality Assessment in Higher Education Japanese translation right arranged with Jessica Kingsley Publishers through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo 1995.
A.I. フローインスティン著、米沢彰純・福留東士訳『大學評価ハンドブック』玉川大学出版部、2007年9月1日、12頁。
- ⁶⁾ 文小原一仁「大学評価としての大学ランキングの可能性」『玉川大学学術研究所紀要』第15号、23-30 (2009)、24頁。
- ⁷⁾ 文主に民間による評価である。しかし、少ないのだが、政府や、教育管理部門などは裏に操ることもある。
- ⁸⁾ 文加藤哲郎「大学ランキングと一橋大学の取り組み」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、43-44頁。
- ⁹⁾ 文喜多村和之「大学ランキングの時代」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号、5頁。
- ¹⁰⁾ 文文部科学省「国際協調により、高等教育機関ランキングの革新的な原則を発表」『高等教育機関のランキングについて』2006年5月30日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06070601/010.htm
- ¹¹⁾ 文間渕泰尚「世界の主要大学ランキング」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、55頁。
- ¹²⁾ 文喜多村和之『大学淘汰の時代』中公新書、1990年。
- ¹³⁾ 文喜多村和之「大学ランキングの時代」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号、9-10頁。
- ¹⁴⁾ 文喜多村和之『大学は生まれ変わるか』中央公論社、2002年。
- ¹⁵⁾ 文間渕泰尚「世界の主要大学ランキング」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号56頁。
USNWRの指標システムは変化することがあるが、大きな変わりがない。USNWRの指標システムの概略を述べたいため、2008年版を採用する。
- ¹⁶⁾ 文小原一仁「大学評価としての大学ランキング可能性」『玉川大学学術研究所紀要』第15号：23-30 (2009)、25頁。
- ¹⁷⁾ 文こうした方法は、アメリカで最も権威のあるとされている全米科学アカデミーの全米研究会議 (National Research Council) が大学院レベルの研究教育の質を評価するために開発した方法に従っている。
- 喜多村和之「大学ランキングの時代」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号、9頁。
- ¹⁸⁾ 文小林雅之「大学ランキングと向き合う」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、12 - 14頁。
ピア・レビュー (reputation と呼ばれる) は多くの大学ランキングの重要な指標として、人々

- の持っている大学ヒエラルキーのイメージを反映したものである。具体的には、高等教育関係者に予め作成された質問紙（大学に関する）に答えでもらうものである。小林はピア・レビューによる生じた問題を論じた。そして、慶伊富長もピア・レビューの歴史に関して論じた。「研究ランキングを考える」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号23頁。
- ¹⁹⁾ 文胡詠梅「中米大学ランキングの比較的分析」『比較教育研究』、2008年第8期、44頁。
- ²⁰⁾ 文小林哲夫「ジャーナリズムからみた大学ランキング」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号、25頁。
- ²¹⁾ 文朝日新聞社出版局「大学」編集室『大学ランキング—日本の大学746校全ガイド2011年版』大日本印刷株式会社印刷、2010年4月25日発行による計算する。
- ²²⁾ 文石塚公康「マス・メディアと大学ランキング」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、32頁。
- ²³⁾ 文加藤哲郎「大学ランキングと一橋大学の取り組み」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、44頁。
- ²⁴⁾ 文 <http://www.arwu.org/resources.jsp> 最後更新 2010-12-03
- ²⁵⁾ 文葉賦（イェフ）桂（ケイ）「大学評価とランキング:最新のな発展と大学に対する価値」『清華大学教育研究』第29巻第1期、2008年2月、66頁。
- ²⁵⁾ 文石塚公康「マス・メディアと大学ランキング」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、2007年11月号、33頁。
- ²⁷⁾ 文葉賦（イェフ）桂（ケイ）「大学評価とランキング:最新のな発展と大学に対する価値」『清華大学教育研究』第29巻第1期、2008年2月、56-71頁。
- ²⁸⁾ 文同上、68頁。
- ²⁹⁾ 文曹漢斌、王福友「大学ランキング:だれが喜ぶ、だれが悩む」『高等農業教育』、2005-3:3:6-8、7頁。
- ³⁰⁾ 文文部科学省「国際協調により、高等教育機関ランキングの革新的な原則を発表」『高等教育機関のランキングに関するベルリン原則』2006年5月30日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gjjiroku/06070601/010.htm
- ³¹⁾ 文文部科学省「国際協調により、高等教育機関ランキングの革新的な原則を発表」2006年5月30日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gjjiroku/06070601/010.htm
- ³²⁾ 文陳武元「中国における大学政策と研究大学の資金調達—X大学の経験から—」『大学財務経営研究』国立大学財務・経営センター 第2号（2005年8月発行）、211-216頁。
- ³³⁾ 文数値来源：<http://www.arwu.org/ARWUMethodology2009.jsp>
- ³⁴⁾ 文「大学ベンチマーキングと評価指標の在り方に関する調査研究—調査報告書」平成18-19年度「先導的の大学改革推進委託」、2008年3月、4-17頁。
- ³⁵⁾ 文それらについて、すでに論じている研究者がいるため、本稿では、論じない。
- ³⁶⁾ 文長谷部英司「機能的な参加型評価システムの在り方」『放送大学大学院 文化科学研究科

政策経営プログラム 修士論文』2003年12月、1頁。

- ³⁷⁾ 文「大学ベンチマーキングと評価指標の在り方に関する調査研究—調査報告書」平成18-19年度「先導的大学改革推進委託」2008年3月、4-17頁。
- ³⁸⁾ 文井下理「大学ランキングの影響と課題」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会1999年3月号、19頁。
- ³⁹⁾ 文金子元久「大学ランキングと大学」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会2007年11月号4頁。
- ⁴⁰⁾ 文天野郁夫「アメリカ大学のランキング・ゲーム」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号、43頁。
- ⁴¹⁾ 文喜多村和之「大学ランキングの時代」『IDE・現代の高等教育』民主教育協会、1999年3月号12頁。
…は引用者による省略である。